

ひだまり



Vol.01
創刊号

社会福祉法人 東京都福祉事業協会



■ もくじ ■

- ① 「ひだまり」発刊に寄せて／理事長あいさつ ② 施設探訪「赤羽北のぞみ保育園」 ④ 施設探訪「赤羽北さくら荘」 ⑥ し・ご・と「浮間ハイマート」黒田彩さん
⑦ WITH・職員紹介「赤羽北さくら荘」武井優美さん ⑧ HISTORY101・協会75年史から ⑩ 協会からのお知らせ ⑬ あの街この街・陽だまり情報

ひとが集い こころを通わす「ひだまり」へ。

どの街にも陽だまりがあります。

そこにはひとが集い

おしゃべりの花が咲き

時には支え合い、助け合う。

私たちの法人には多くの事業所があって
沢山の仲間がひとを支え、希望の灯をともしながら
明日に向かって頑張っています。

そんな仲間たちのことを
お互いにもっと知りたい。
他の事業所のことも知れたらうれしい。

そんな思いから「ひだまり」が生まれました。
みんなから声を聞き
編集委員がその声を発信する。
そして、利用者の方、ご家族の方、保護者の方にも
私たちの法人のことをもっと知っていただく。

「ひだまり」はこころ通わす陽だまりです。



●機関誌「ひだまり」の発刊に寄せて

東京都福祉事業協会理事長

田中敏雄



このたび、東京都福祉事業協会では、協会機関誌「ひだまり」を発刊することになりました。

この「ひだまり」は、当協会の職員が各種の情報を共有するとともに、自分の勤務する施設のみならず協会全体を一体として感じていただくために企画し、刊行するものです。また、保護者やご家族、関係機関の方々にもお読みいただきことを考慮した内容にしたいと考えております。

当協会は、大正6年(1917年)にその前身となる東京府慈善協会として発足し、昨年2月11日に創立百周年を迎え、次の百年に向けて新たなスタートを切ったところです。

現在、協会には、7つの保育所、3つの母子生活支援施設、4つの高齢者施設の14施設あり、利用者数は、1日に2,000人を超えております。その中で、昼夜を通じて様々なサービスを提供し支援を行っている職員数は700人近くになっております。

このように大きな規模の法人であり、しかも、施設所在地が4区1市に及んでいますので、日常的な職員間の交流や情報共有がなかなか難しい面があります。この「ひだまり」により、各施設の日常の素顔や行事の様子、地域の方々との交わり等を紹介することや、職員の方が日頃考えていることを寄稿していただくことなどを通して、職員一人一人が協会やすべての施設を感じられるようになればと考えております。

また、私たちの仕事は、子どもの健全な成長、母子家庭の自立、高齢者の安心・安全な生活等を支援するためのサービスの提供です。その実施にあたっては利用者の基本的人権等に関わる様々な配慮が求められますが、加えて運営費の多くは公費によって賄われております。このため、各種法令等に基づいて業務を遂行することが必要です。このような要請にも「ひだまり」を活用し、専門的援助技術の情報をはじめ、行政通知やその背景となる社会の動き、協会諸規程の改正内容など、業務の基盤となる情報もわかり易くお知らせし、その周知を図っていきたいと考えております。

『社会福祉法人東京都福祉事業協会は、人の幸せを求めて事業に取り組んでまいります。それは、利用者の幸せ、利用者の家族の幸せ、地域住民の幸せ、そしてこれらを支える職員の幸せです。』

この当協会の経営理念の下、日々業務に努められている職員の皆さんのが糧として機関誌「ひだまり」がお役に立つことを願っております。

子どもの「好き」を見つけ 生きる力を育む 保育をめざして



赤羽北のぞみ保育園

坂道を上った高台の一角にある赤羽北のぞみ保育園。2017年4月に協会創立100周年記念として、特別養護老人ホームと併設した複合施設として誕生しました。鉄筋コンクリート5階建ての1階部分が定員100名の「赤羽北のぞみ保育園」です。子どもたちの生活を見学し、園長、職員に話を聞きました。

「食」を大事にした ガラス張りの調理室

玄関を入ると、木の温かみのある大きなホールが広がり、その奥にはガラス張りの調理室が見えます。赤羽北のぞみ保育園の一番の特徴は、「食」を大事にしていること。そのため、全面ガラス張りで中が見える調理室を施設の中央に設置し、床を一段低くして、子どもの目線から調理風景が眺められるようにしました。園児たちが移動する

度に、匂いや食べ物、つくる人を身近に感じられる仕組みです。

「食べることは生きることに直結するでしょう。食事は元気や力の源。命をいただくことなので、全てにつながっていく。だから、食べることを真ん中に置き、つくる人の気持ちもわかるようにしたいと思いました」と村上たか子園長は意図を説明します。

朝には出汁をとるための昆布が吊るされ、昼どきには美味しい匂いが漂い、午後にはおやつのクッキーをこねる。食材に興味を持つ子も多いと栄



▲保育園の中央にあるガラス張りの調理室



▲栄養士の杉浦由美恵さん

養士の杉浦由美恵さんは言います。「食べることが好きな子を育てたいと思っています。献立は一汁三菜の和食中心で、季節のものや伝統食材、魚や豆腐も積極的に取り入れています。こんなにやくをちぎったり、しめじを裂いたり、子どもたちも簡単な調理を手伝うと食べ方が違いますね。いずれは魚のさばき方のデモンストレーションなど、命の大切さを伝える食育もていきたい」と、意欲にあふれています。

添加物なしで、おやつも手づくりメニューを見ると、押麦ご飯や郷土料理



もあります。保育園できちんと考えられ、手をかけた食事が食べられるということは、働く保護者にとっても、安心で心強いことでしょう。

子どもにとって必要な存在になれる保育の仕事

一方、保育室では、先生たちがそれぞれ工夫しながら、自由に遊びが展開されていました。ダンボールの家など、手づくりのおもちゃも多い。教室の一角では、まるで家のように炊飯器でご飯を炊いています。オムツも紙ではなく、布おむつ。濡れて気持ち悪くなったオムツを、言葉を添えながら替えることで、保育者と子どもの心が通うコミュニケーションになるとを考えているからだそう。建物は近代的ですが、家庭的で温かな雰囲気を大事にしていこうという様子がうかがえます。

公園に散歩に行くというクラスについて行きました。団地を抜けると運動場のある公園です。広々としたグラウンドで、子ども達はかけっこ。かと思えばアリに夢中になったり。思い思に過ごします。

園で唯一の男性保育士、摸利亮介さんに話を聞きました。保育士になって16年。子どもと遊ぶのが好きだったため、保育士を志したと言います。「女性の保育士とは子どもの接し方が違うのでしょう。やはり男の子の遊びに共感することが多く、男子がどういうことが楽しいか分る点が男性保育士のメ

リットかもしれません。子どもはシビアで、面白い遊びに正直に寄って行く。自分がどんな遊びをしてきたか、どんな生活をしてきたか、ある意味人間力が問われます。保育士というのは、0～6歳までの長い期間を共に過ごすことで、子ども達が生きて行くために必要な存在、関係になれる。そこが会社員とはすごく違うところで、やりがいのある仕事だと思います」。



▲保育士の摸利亮介さん

子どもの気持ちを大事にした保育をめざして

赤羽北のぞみ保育園の特色のひとつである、高齢者施設と保育園の複合施設という点については、合同の誕生会を開催するなど、月1回程度の交流が行われています。まだ開設間もないこともあり限定的ですが、今後は季節のイベントや交流をする予定です。

現時点では、日常的にお年寄りを見ることでむしろ自身の考えが変わってきた、と村上園長は話します。「生きる



▲村上たか子園長(右)の好きな絵本は「ばばあちゃん」。梅原淳子主任(左)の好きな絵本は「こっこさん」



▲特別養護老人ホームと一体型の保育園ということを考えることが多くなりました。子どもとお年寄りは対照的ですが、営みはつながっています。そういうことを考えると、限られた人生の中で、子どものやりたいことを止めるより、好きなだけやりたいようにさせたいという思いが強くなってきました。自分がこれだけは好き、やりたいというものを持っていると、自信を持って生きていける。そうした明日に向かって生きる力は、遊びの中で夢中になれるものから見つかるでしょう。意に反したものからは見つけにくい。そういう意味でも、遊びを重視して、子どもの自主性を尊重した保育をしたいと考えています」。

子どもの気持ちを大事にした保育とは、例えば給食の時間になんでも、遊びに夢中で続けたい子がいたら、その子が納得するまで待ってあげる。大人の考え方で子どもを集め保育で動かしたり、強制しない。そうした根気強く見守る新しい保育は、子どもの数も少なく、先生たちも新しい、立ち上げたばかりの新設園だからこそ、チャレンジできるやり方もあると思います。昔からの家庭的な温かさの中で、新しい試みを意欲的に取り入れている「赤羽北のぞみ保育園」の今後が楽しみです。

赤羽北のぞみ保育園の基本情報

〒115-0052

東京都北区赤羽北3-6-10

TEL:03-3900-1208

JR埼京線北赤羽駅より徒歩7分

地域に深く根ざし 一人ひとりの職員が専門性を発揮して 高齢者を最期まで支える



特別養護老人ホーム 赤羽北さくら荘

JR埼京線の北赤羽駅から7分ほど、明るく開けた高台に「赤羽北さくら荘」があります。かつては浮間さくら荘と呼ばれていた施設ですが、2017年に今の名称に変えて移転しました。一階には保育園が併設されています。特別養護老人ホームやデイサービス、訪問介護など、様々なサービスで地域の福祉を支える介護の最前線を訪ねました。

特別養護老人ホームを “終の棲家”に

介護が必要になったお年寄りの“終の棲家”とされる特別養護老人ホームは略して「特養」と言われますが、どの様な施設なのでしょうか。基本的には自宅で生活が困難になった高齢者のための施設です。現在は5段階ある介

護度が3(要介護度3)以上の人しか入所することができません。要介護度3というのは「立ち上がりや歩行、食事、排せつ、入浴の際に全面的な支援が必要な状態」を指します。つまり、常時誰かの支援や見守りがない限り、日常生活がままならない人たちのための“住まい”が特養です。利用者は、必要度(介護度等)に応じて行政(ここでは北区)が作る優先順位付けをした名簿によって、本人や家族の希望も聞きながら、空床のある各施設に入所することとなります。

赤羽北さくら荘は一時的に入所するショートステイを含めて160床の特養です。常勤、非常勤を含めて約70名の介護職員、7名の看護師、2人の機能訓練士などが、24時間、利用者の日常を支えています。

明るく広々とした スペースが印象的

早速、施設内を見てみましょう。井坂哲朗副施設長にご案内いただきました。明るく広いエントランスの一画には、法人100年の歴史を知ることができます。写真の一枚一枚から時代の重みが感じられました。2階以上が高齢者の住まいですが、2種類の居室形態があります。ひとつが個室です。12室がひとつのユニッ



▲明るく、ゆったり

トを形成しています。もうひとつは4人が一部屋で暮らす多床室と呼ばれるものです。多床室とは言っても仕切りでセパレートされていますから、しっかりとプライバシーが守られています。「賑やかだから多床室がいい」という利用者も多いようです。

ここでは食事が何よりの楽しみです。管理栄養士がつくる献立はとても好評だとか。その人の介護度に応じて食事の形態もきめ細かく調整されます。食事が終わったあとはそれぞれのお部屋か食堂などで思い思いの時間を過ごします。しかし、職員は片時も利用者から目を離せません。排せつ介助や歩行訓練、時には近くの公園に散歩に出ることもあります。入浴は基本的には週に2回。その人の状況に応じた入浴形態がとられます。

ゆったりとした開放的な空間と行き届いた清掃、利用者の穏やかな表情と共に、何よりも職員のてきぱきとした動きと笑顔が印象的な赤羽北さくら荘でした。



▲食堂でくつろぐ

一体感を醸成して 働きやすい職場に

見学の後、鮎沢三男施設長にお話を伺いました。開設から1年5か月。何よりも新しく入職してくれた若い職員を「失望させない職場にしたい」。そのためにもフルオープンに向けて奮闘する毎日です。今年から、現場の声にき



▲鮎沢施設長（左）と井坂副施設長
め細かく対応することなどを目的に、新たに副施設長が置かれました。介護職、看護職など職域を超えた“一体感”を作りたいとのこと。すべての職員が「さくら荘に来てよかった」と言ってくれる施設にしたいとのこと。

前身の浮間さくら荘では退職する職員がほとんどいなかったと言います。いったん辞めた職員がリターンしていくことも多かった。これが「さくら荘」の文化であり、伝統だと施設長。赤羽北さくら荘でもこのような一体感を醸成したいと願っています。

福祉の拠点として 地域の安心を支える

お揃いの着物を着た女性たちを、併設するデイサービスで見かけました。時折ボランティアで歌謡舞踊を披露してくれる「暁寿会」という地元の会だとか。さくら荘は浮間の時代から地域との繋がりを大切にしてきました。いつも10人近くの人がデイサービスに顔を出し、お茶出しや利用者の話し相手をしてくれていました。新しくなった施設にも時折訪ねてくれます。

地域とのつながりを大切にする。これも「さくら荘」の文化であり伝統かも知れません。定年退職し再任用も終わった65歳以上の元気な地元の方に、短時間の働く場を提供する「生きがい就労事業」をスタートし、有償ボ

ランティアとして清掃や草むしりなどを手伝ってもらっている。最初は3名から始まりましたが、フルオープン後はさらに拡大したいと言います。地元の自治会の会員となりお祭りなどにも積極的に参加し、災害時にはお互いに助け合う「相互応援協定」を結んでいます。施設に何らかの被害があれば地域の人たちに支援をしてもらい、災害によって行き場がなくなった地域の人たちを一時的に施設に避難させる。施設長は「高齢者施設もこれからは地域にどう貢献できるかが問われている」と言います。地域の福祉を支える“拠点”として期待されている赤羽北さくら荘です。



▲設備が整う浴室

特養はお年寄りの“終の棲家”と言いました。人生の最期を迎える場として、特養が果たす役割はとても大きいのです。赤羽北さくら荘は4名の嘱託医と協力して、穏やかな終末期を過ごすための体制を整えています。夜中でも先生が駆けつけてくれる。

地域に安心と安寧を提供するのが福祉施設の大きな役割であり、使命です。様々な職種の職員がその専門性を発揮して頑張っている「赤羽北さくら荘」に、大きな期待が寄せられています。

赤羽北さくら荘の基本情報

〒115-0052
東京都北区赤羽北3-6-10
TEL:03-3900-3901
JR埼京線北赤羽駅より徒歩7分



福祉の施設ではさまざまな仕事があります。
私たちの法人でも多くの「専門職」が利用者を支え、生活を支援しています。
このコーナーではそれぞれの仕事についてウォッチします。
頑張る姿は仕事が違っても変わりがありません。
日々の仕事のヒントになるかも。

母子生活支援施設 北区立浮間ハイマート 黒田彩さん



小さな“成果”に喜びを見出して、母と子を支援する。

外からはうかがい知れませんが、人は様々な困難を抱えながら生きています。生きづらい、居場所がない、生活ができない。そのような人たちの「セーフティネット」になっているのが福祉制度だと思います。今回、取り上げるのは母子生活支援施設です。その名の通り、困難を抱えた母親と子どもを保護し、支援する施設です。かつては「母子寮」と言われていました。私たちの法人では1925年(大正14年)、和田堀母子寮から事業が始まり、現在は3か所の母子生活支援施設を運営しています。あまりなじみのない施設かも知れませんが、さまざまな“思い”を持ちながら母と子の自立に向けて頑張る、母子支援員の黒田彩さんを「北区立浮間ハイマート」に訪ねてお話を聞きました。

何より大切なのは 話を聞くこと

20年前に開設された「北区立浮間ハイマート」は、団地の1階から4階までに24室。1階に集会室や学習室があり、2階以上が1DKと2DKの居室になっています。入居期間は原則2年間ですが、それ以降は事情によって配慮されることもあります。職員は10名。母子支援員は母親の相談窓口、少年指導員は子どもに対する対応が主な仕事です。黒田さんは自分の仕事を「何でも屋」と言います。母子支援員であっても子どもたちの勉強も手伝う。もちろんこまごまとした日常生活のサポートが欠かせません。話を聞くことも大切です。それによって利用者との間に信頼感が生まれる。「好きじゃないと出来ない」と黒田さん。2年間は短いとも言います。「もっと見てあげたい」と思うことも…。2年間で子どもたちも成長します。思春期や反抗期になったり、受験期を迎える。つぎつぎと課題が出てくる。地域に出るタイミングを見極めることの難しさを感じます。今は、施設を“卒業”したあとのアフターケアにも取り組む。施設の行事に招待したりその後の生活をフォローする時もあります。

利用者の「有難う」が うれしい

若い黒田さんが、様々な課題を抱える母親の相談に応えるためには、自分のスキルを更に深めなければならないと日々感じていると言います。しかし、利用者は同年代の母親が多い。入居の動機は家庭内暴力(DV)だけではなく、家族との折り合いが悪いために、家を出ざるを得ない人もいる。黒田さんは同じような年代ということもあって、上から目線ではなく「その人の気持ちを理解したうえで、話しを聞き、受け止めてあげたい」。利用者との“距離感”が難しい。自分がこれまで経験したことの無い人生を歩む利用者にどう接すればいいのか。最初は戸惑いがあるても、今は楽しく仕事ができていると言います。

「この仕事は目に見えて成果が出ることがありませんが、利用者から“有難う”と言われるのが何よりもうれしい」。ささいな成果が喜びとなり「また頑張ろう」という気持ちになる。これからはもっとスキルを上げて「お母さんの期待に100%応えてあげたい」「何よりも、目の前にいる人の助けになることに尽きる」と黒田さんは言います。ガンバレ、黒田彩さん。



▲施設行事「夏祭り」

知っていますか、母子生活支援施設のこと

母子生活支援施設は1947年に制定された「児童福祉法」によって定められた施設です。18歳未満の子どもを養育している母子家庭、または何らかの事情で離婚の届け出ができないなど、母子家庭に準ずる家庭の女性が子どもと一緒に利用できます。1998年の児童福祉法改正によって「母子寮」から「母子生活支援施設」に名称が変わり、その目的も「保護する」から「保護するとともに、生活を支援する」に改められました。つまり、母子を保護するだけではなく、その自立を促すために母親の就労、子どもの教育に関する相談、助言なども行います。施設には母子の居室のほか集会室や学習室があり、母子支援員、少年指導員等の職員が配置されています。

私たちの法人では700人近くの職員が働いています。仕事や施設が違えば殆ど顔をあわせることがないかも知れませんが、みんな心をひとつにする仲間です。このコーナーではさまざまな職場で頑張る仲間を紹介します。今回は創刊号ということで、フレッシュな新人職員武井優美さんを赤羽北さくら荘に訪ねました。

赤羽北さくら荘 介護職員 武井 優美さん

楽しい利用者とのふれあい。
前向きなスタンスで大きく育つ

中学生の時から志した高齢者のケア

真新しい建物が秋空に映える特別養護老人ホーム・赤羽北さくら荘に相応しく、武井さんは今年の春に高校を卒業したばかりの「フレッシュ・ワーマン」です。出身は何と施設の目の前にある都立桐ヶ丘高校。しかし、近さだけで赤羽北さくら荘を選んだわけではないようです。

そもそも武井さんは何故福祉の仕事を選んだのでしょうか。「長く祖父母と一緒に暮らしていくから、中学生の時から高齢者のケアに関心がありました」。高校も介護の資格が取れるということで選んだとのこと。就職に当たっては多くの施設を見学し、介護の体験もした。武井さんは事務職員の対応や介護職員の仕事に対する向き合い方に、多くの疑問を持ちました。「ぶつきらばう」であつたり、利用者に目が向いていないあたり。

赤羽北さくら荘を訪ねた時の印象がとてもよかつたと言います。いつもここにこっていた事務職員の方、緊張感が感じられた介護現場。どれも武井さんのハートに「グット」来たようです。フロアの天窓から光が降り注ぐ施設にも惹かれました。このような経験から学んだのは「日ごろの態度が重要」であり、「常に第三者の視線もある」と思いながら仕事をすることでした。

利用者とのふれあいと職員の結びつき

入職して2～3ヶ月は先輩職員についてさまざまな職場を経験しました。早番の職員に16時まで付いて、そのあと17時30分まで他のユニットに入るとか…。職員によってケアに対する考え方方が違う時もありますが、そのことも勉強になつたと言います。「リーダーの考え方も、いろいろなやり方を経験した上で自分のやり方を見つけてほしい」という考え方だったのではないかと思っています」と武井さん。

今一番やりがいを感じているのは、利用者の「ありがとうございます」と言います。それに、先輩職員のサポートが手厚いこと、職員同士の結びつきの強さもモチベーションを高めてくれています。何かあつたら「大丈夫?」と声をかけてくれる。だから、「仕事をしていて、気持ちがいい」。分かることがあれば、積極的に聞くようにしている。時には命にも関わる仕事だから。例えば服



入職して半年がたつた今、仕事を任される喜びを感じている反面、知らないうちに負荷がかかっていると感じる時もあるとか。しかし、自分ができることはなんでも経験したいという思いも強い。そうでなければ、仕事が身につかないのではないか、と。

経験を重ねる中で、早く自分のスタイルを見つけたい。そして、身に付けたやり方を通して、武井さんの前向きなスタンスはとても頼もしく感じました。大きく育つてほしいものです。

HISTORY
101

多摩川や品川の海に、 時代の最先端を行く公設遊泳場を開設。 これも協会の歴史の1ページです。

協会は昨年100周年の節目の時を迎えました。その歩みは日本の福祉が刻んできた歴史に重なります。今年から新たな世紀に向けて一步を踏み出したのを機に、協会の足跡を数々のエピソードから振り返るのも意義があることではないでしょうか。平成8年3月に発刊された「東京都福祉事業協会75年史」から興味深い事業や話題、出来事等をピックアップし、シリーズで紹介します。第1回は「公設遊泳場」です。

公設遊泳場の話題の前に、大正9年(1920年)という時代をいくつかの話題からイメージしておきましょう。まず、明治神宮が創建されました。意外と新しい神社なんですね。国勢調査が実施され、上野公園で初めてメーデーが開催されたのもこの年です。ちなみに日本的人口はおよそ5,600万人でした。今や新年の風物詩になっている「箱根駅伝」はこの年の2月、スタートしました。参加校は早稲田、慶應義塾、明治、そして東京高等師範(現在の筑波大学)のわずか4校です。雑誌「婦人之友」が“女中”にかかる呼び名を募集した結果、“お手伝い”が選ばれたと言う面白い話題もあります。

さて、本題に入りましょう。このように何となく自由な空気が漂う時代を背景に、社会体育施設が市民生活に取り入れられるようになり、協会は東京府(当時は“府”です)の指示で「公設遊泳場」の建設と水泳指導の人事対策に取り組みました。当時、体育は“思想善導”的方法として最も奨励されていたようです。

遊泳場は江戸川、品川、多摩川、石神井の4か所に作られ、大正12年7月に開場しました。いずれも遊泳場として適格と認められ、取り巻く環境も個性的でした。どの遊泳場も水泳安全区域を設けたことはともかく、男子部、婦人部、児童部の3部に分けたところは時代を感じさせます。また、更衣所と休憩所、湯呑所、救護所を設け、水泳教師を常駐させるなど、安全の確保と水泳指導は万全だったようです。



▲遊泳場開設を告知するポスター



ちなみに大正9年の入場者の延べ人数は江戸川が3,325人、品川が11,158人、多摩川が8,816人、石神井が4,109人で、合計27,750人、1日平均で529人であったということです。当時の評価として、雨天続きの割には休場した日が少なかったものの、洪水のために遊泳場としての適格性に欠けていることも多かったとし、自然環境に左右されない遊泳場の設置が望まれる、としています。このような指摘は都市化が進んだ時代背景がうかがわれて興味深く、やがて品川と江戸川の遊泳場は廃止となり、関東大震災後は遊泳場の運営を地元町村等に移譲。以後、このような公衆遊泳場が増えることはなく、河川を利用するよりもプール建設が進められるようになりました。

<各遊泳場の概況>

●江戸川遊泳場(南葛飾郡小岩村大字小岩田字高下)

水面の広さは約方30間(55m²)、水深は2~6尺(0.6~1.8m)。水流緩にして水質良成。沿岸桜樹の陰深く鴻之台(千葉県市川市国府台)の翠巒(スイラン:緑色の山々)を望み、風光よろしく納涼に適す。

●品川遊泳場(品川町旧品川台場地先)

海面の広さ約30間(55m)遠浅にして、満潮時といえども最も深き処に達せず。水底砂土海水清澄ならざるも、品川湾中にありて唯一の遊泳場とす。

●多摩川遊泳場(北多摩郡調布町字上石原地先)

水面出幅約20間(36m)、長さ100間(182m)、流水清澄にして深さ2~10尺(0.6~3m)。最も遊泳に適せり。付近河原広く、また八幡の森、多摩川公園、堤防下の芝生等散策の好所少なからず。

●石神井遊泳場(北豊島郡石神井村三宝寺池隣)

古池の東隣の稻田を深さ3~9尺(0.9~2.7m)の堀池となし、毎年の継続事業となす目的にて設けられたるものにて、周囲の眺望よく、豊島氏の古墳を探るも好し。



INFORMATION

協会からのお知らせ

社会福祉法人制度改革について

協会運営はさらに自律性を重んじながら、新たな地域貢献へ

平成29年度、改正社会福祉法が施行され社会福祉法人制度の改革が実施されました。改正内容は、①経営組織のガバナンスの強化(議決機関としての評議員会を必置、一定規模以上の法人への会計監査人の導入等)、②事業運営の透明性の向上(財務諸表・現況報告書・役員報酬基準等の公表に係る規定の整備等)、③財務規律の強化(社会福祉充実残額の社会福祉事業等への計画的な再投資等)、④地域における

公益的な取組を実施する責務等といったものです。

上記①に伴い、協会は平成29年度のサービス活動収益が30億円を超えたことから、平成30年度より会計監査人を導入することとしました。これらの改革にも後押しされる形となります、協会の運営はさらに自律性を重んじつつ新たな地域貢献にも取り組んでいくこととなります。

規則・規程の改正のお知らせ

●育児休業は子が2歳になるまで取得できるように

育児休業については、これまで子が1歳6か月に達するまで取得可能となっていましたが、平成29年10月からは、子が2歳になるまで取得できることとなりました。

※手続きとしては、

- ①まず1歳に達するまでの育児休業の申し出
→ 保育所に入所できない等、1歳を超えても休業が特に必要と認められる場合 →

②1歳6か月に達するまでの育児休業の申し出
→ 保育所に入所できない等、1歳6か月を超えても休業が特に必要と認められる場合 →
③2歳に達するまでの育児休業の申し出

と計3回の手続きが必要となります。(最初の育児休業の申し出の際に子が2歳に達するまでの申請はできません。)



●介護休業(93日)を分割して取得可能に

介護休業については、介護を必要とする家族1人につき、通算93日まで原則1回に限り取得可能となっていましたが、平成29年1月からは、対象家族1人につき通算93日まで、3回を上限とし

て、介護休業を分割して取得することが可能となりました。また、介護休暇については、これまで1日単位での取得としていましたが、半日単位での取得が可能となりました。

規則・規程の改正のお知らせ

●経理規程の改正について

平成29年3月29日付「社会福祉法人における入札契約等の取扱いについて」(厚生労働省社会・援護局福祉基盤課長他)により、入札基準を見直しました。

また、平成30年度からの会計監査人の導入に係る改正を行いました。



●パートタイマーの無期労働契約について

パートタイマー就業規則を改正し、「無期転換ルール」を定めた改正労働契約法(平成25年4月1日施行)に基づき、有期労働契約が更新されて通算5年を超えたときは、本人の申し出により、期間の定めのない労働契約(無期労働

契約)とすることとし、常勤職員と同じ65歳の定年制を設けることとしました。



転倒事故、自転車の事故に注意を

当協会の労災発生の統計(平成25~29年度; 総件数50)では転倒32%、当たる・ぶつける26%、自転車14%、腰痛8%、その他20%となっています。特に転倒事故

や自転車での事故では、骨折により長期間入院する方もいました。以下について常にチェック等をお願いします。

- ☆通路・階段・出口等にモノを放置していませんか。
- ☆床の水たまり等は放置せずその都度取り除いていますか。
- ☆特に浴室等では注意を促す標識を。
- ☆安全に作業できる照度を確保していますか。
- ☆自転車の「ながら運転」は絶対にダメ。
- ☆自転車は道路交通法上は歩行者ではなく「車両」です。
十分な安全確認を。



TOPICS

役職員新年会で18名に永年勤続表彰 恒例の第2部(余興)は 赤羽北のぞみ保育園が最優秀賞に

平成30年1月19日(金)に東京グリーンパレスにおいて、「平成30年役職員新年会」を開催し、205名の役職員が参加しました。母子生活支援施設や特別養護老人ホームでは勤務のため新年会に参加できない職員が多くおり、勤務されていた職員の皆様にあらためてお礼申し上げます。当時のレポートです。

新年会に先立って、平成29年度の永年勤続表彰式が行われ、勤続30年5名、勤続20年5名、勤続10年8名、計18名の職員の名前が読み上げられた後、新年会出席者の前で表彰式が行われ、田中理事長より表彰状を授与されました。



▲永年勤続表彰式の直後の方南隣保館保育園のみなさん左から、用務員の清野さん(30年)、吉田園長(30年)、保育士の鈴木さん(20年)、保育士の小坂さん(20年)

引き続き新年会となり、田中理事長による新年の挨拶の後、理事長の音頭で乾杯し、歓談の時間となりました。

その後はお待たせしました、第2部(余興)の時間です。当協会の新年会の第2部(余興)は、参加する施設の披露する余興の完成度が年々

上がり、毎年大変な盛り上がりを見せています。それとともに余興に参加する施設も増え、今年は過去最高となる9施設が余興を披露し、司会進行は浮間ハイマートが担当しました。

参加施設は日ごろ忙しい勤務の合間に練習を重ねた成果を存分に発揮し、どの出席者の顔を見ても笑顔がはじける内容で大盛況となりました。

審査結果の発表です。敢闘賞(第3位)は宴会場で組体操をするという離れ業をやってのけた「八王子隣保館保育園」、優秀賞(第2位)はペープサート(紙人形劇)と劇を組み合わせた非常に完成度の高い『オオカミと七匹の子ヤギ』を披露し審査員を唸らせた余興初参加の「板橋区立母子生活支援施設」、最優秀賞(第1位)の栄冠に輝いたのは、開設1年目でありながら抜群のチームワークで会場全体の心を掴んだ「赤羽北のぞみ保育園」がありました。

今年も大盛況のまま幕を閉じた新年会。職員の努力の結晶とチームワークの良さを見せてもらいました。



▲熱いダンスで会場を魅了した赤羽北のぞみ保育園



あの街この街・陽だまり情報

季節を感じながら、みんなで楽しめる飛鳥山公園

私たちの法人は多くの街に事業所がありますが、どの街にもホッとできる「陽だまり」のような場所があるものです。それは公園であったり、カフェであったり…。このページではそれぞれの事業所がある街で親しまれている、「とっておき」の陽だまり情報を紹介します。

第1回は本部と王子駅保育園がある『王子』にフォーカスしました。歴史ある飛鳥山公園はお子さんからお年寄りまで楽しめる、北区きっての人気スポットです。

子どもたちの ワンダーランド



▲可愛いアスカルゴ

カルゴ」。
形がどこ
かカタツム
リ(エスカ
ルゴ)に似
ているこ
とから、飛



▲散歩道

鳥山のエスカルゴでアスカルゴ。納得で
す。もちろん無料で乗れます。公園の上までたった2分足らずですが、ちょっとした
“旅”気分がうれしい。子どもたちも大は
しゃぎでした。

木々の間を少し歩くと視界が一気に広
がりました。小さな“お城”を中心に、かつて活躍した都電と蒸気機関車のD51が展

示され、さまざまな遊具が点在する子どもたちのワンダーランド「こどものひろば」で
す。木陰ではいくつものグループがお弁当を広げ、くつろいだ時間をすごしています。保育園の仲良しと、たまにはピクニックに出かけてみても良いかも知れませんね。



▲楽しいこどものひろば

お花見や秋のもみじ ちょっと ぜいたくな時間を

八代将軍徳川吉宗が江戸っ子たちの行楽地とするために、桜の名所にしたといわれる飛鳥山公園。春のお花見、夏の緑陰、そして秋のもみじと、季節を感じながらすごす時間はとてもぜいたくなっています。3つのミュージアムも楽しみのひとつ。「飛鳥山博物館」では王子を中心とした北区の歴史を体験することができます。展示物のひとつひとつが大変興味深く、新たな発見があるはずです。「紙の博物館」はその名の通り紙の全てを学ぶことができますが、紙すき体験も楽しめます。日本の近代

経済社会の礎
を築いた渋沢
栄一の全生涯
にわたる資料
を収蔵し展示
している「渋沢
資料館」も必



▲飛鳥山博物館

見です。散策の途中、“茶店”でちょっとひと休み。時にはちょっと贅沢な時間、すごしてみませんか。



▲紙の博物館



- ・JR京浜東北線王子駅中央口または南口下車すぐ
- ・都電荒川線飛鳥山駅、王子駅前下車すぐ
- ・あすかパークレールは午前10時～午後4時まで運転



社会福祉法人
東京都福祉事業協会

ひだまり (Vol.01・創刊号)

■発行日 2018年11月

■発行 社会福祉法人 東京都福祉事業協会

〒114-0002 東京都北区王子2-19-21

TEL 03-3911-3679 FAX 03-3911-6498